

## 2014 年度第 7 回 長崎大学経済学部ファカルティセミナー

2014 年度第 7 回長崎大学経済学部ファカルティセミナーを以下の要領で行います。教職員、大学院生、学生の参加をお待ちしています。

日時：2014 年 12 月 17 日（水） 14:30～16:00

場所：ファカルティセミナー室

報告者：藤田 渉（長崎大学経済学部）

報告タイトル：輸入制約構造と輸出誘発輸入から測る産業構造の変化

### 要旨：

世界の貿易量激増の背景には「国境を越えたプロセスの細分化」であるフラグメンテーション（fragmentation）などがあるとされる。これらの現象の定常性や過渡性についてはまだ実証分析は少ないが、一つ的手段として産業連関表によりその循環的構造を測ることが可能である。例えば Hummels の vertical specialization share（VS または VSS）では非競争輸入型表が用いられる。これに対し本研究では入手容易な競争輸入型表を積極的に利用して、各部門、特に中間財生産部門の海外とのリンケージについて定量的に評価し、国内産業部門の状況を遅滞なく把握することを研究目的とした。ここでは国内の各製造業部門の動向を、国外との量と質のリンケージ、すなわち貿易量と技術的なキャラクターで評価し、国際分業構造のリンケージからの乖離を見るのが本研究の視点である。そのための分析として、(a)輸出誘発輸入（後方連関効果）から、国外との技術的な結合の粗密を測る、(b)輸入制約の波及効果（前方連関効果）から、国外との技術的な結合の強弱（輸入制約ショック規模）を測る、(c)輸入制約の直接効果の後過程を、前方連関効果と後方連関効果に分けて比較し、国内のリンケージの強さを測る、(d)以上と貿易量推移との総合的に比較する、を行った。

国際貿易のリンケージに組み込まれ、そして脱落する過程は単純ではない。このため推移・変化を測る指標群と、その分析の種類は、①同部門間の貿易量（輸出×輸入）、②内生部門比率、③輸入制約ショックが続く場合の、輸入制約の波及効果（前方連関効果）、④輸入制約ショックは直接効果のみで、あとは後方連関効果が働くとしたときの、輸入制約の波及効果（前方連関効果＋後方連関効果）、⑤「③・④」の効果の比較（国内のリンケージの残存性）、⑥輸出誘発輸入（後方連関効果）、⑦輸出誘発輸入における同部門への誘発輸入比率を選んだ。

③、④については、輸入制約の波及効果、すなわち前方連関効果とその variation を指し、Ghosh model の 2 種類の variation を試算する。⑥、⑦は輸出誘発輸入（後方連関効果）と、同部門への誘発輸入比率を指している。

分析結果は(1)輸出誘発輸入の動向と(2)前方連関効果の考え方による輸入制約によるショックの規模で示されている。

ファカルティセミナーでの報告を希望される方は、研究委員会ファカルティセミナー担当者（大倉）までご連絡下さい（メール：[okura@nagasaki-u.ac.jp](mailto:okura@nagasaki-u.ac.jp) 内線：328）。また外部者による報告も受け付けていません。